

要人勸業形骸傳全

分六寸三	コ	ヨ	紙	表
分二寸五	テ	ク		
寸	三	コ	ヨ	粹文本
分八寸三	テ	ク		

序

男子傾城より先くむく十七の以
やを。跡と海の家。約め。ま。こふ。こふ
こ拾らる。海とま。入。事。け。こ。
つ。事。七。月。の。月。も。も。ま。ま。ま。ま。
影。卵。知。く。け。く。卵。又。仕。人。ま。ま。

ふ。都。も。ま。ま。ま。の。月。は。ま。ひ。か。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
お。と。お。の。一。羽。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
心。得。神。の。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
り。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
市。が。大。ま。ま。ま。川。の。三。年。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
乃。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
枕。と。思。ふ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
九。の。枕。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
佛。佛。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
取。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

志願の如くもせしめぬ人。
 人形屋の博全親。はまひ
 子あり拵ひの尻拭りたるの女
 是れなり。是れ世の中
 人なり。正月をも

かゝるもの尻拭ひのしやりと
 是れなり。是れ世の中
 人なり。正月をも

蓬菜山人



序

男子傾城はじめてひらく十七の頃とは。綿と扇の春駒より。三千三百拾
 三日ほどまへの事にして。當世は。後の月にも足らざる年に鵜卵をくらつ
 て。細腰に仕ん度にくるしみ。禮は奈の内の仕まひを逃ん事を案じ。樂は
 三圍の堂に目をおどろかし。射は三絃宮の大家と心得。御は有の名乗と思
 ひ。書はなぐに。みよしの半切を費し。秋は生玉子に手際を見せ。六藝の
 内一ツもしらず。只忙然と月日をおくれ共。予が大家は深川に三年。吉原
 に三とせ。新宿に三年。四季のもやうをむねに納めて。世を規蛇と思へども。
 既に兵糧盡で。樓情もむなしく。妓婦に後をみせければ。西驛の企も止ま
 りて。今は書出しを丸めて枕とし。たのしみ此中に有。富貴我に於て。浮
 める雲のどしと勉強ては見ても詰らぬ故。うそと戀とを二タおもて。兒
 手柏をどう取つてと。ちる袋をも木にかけしぼつて見ても出来ぬは金。
 愚人贅漢の借金組と。仕まひは父母に拂ひの尻。拭はせるのも是非もなく。
 是も世の中なんと。正月筆をとりぬ。

かにほどの尻をぬぐつてやうくと

育れば又紙華のしり

天明十三を

卯たぬ春

蓬菜山人歸橋述

蓬菜山人

愚人贅漢居續借金

縁に女郎買のぬかみそ汁といふ事を。
いかなる事と尋るにぬかみそ汁には
あらず。我高慢知るといふ事にて。人
にすれば世の中も角ひしなく。高ひ
面もせず付合もよく成といふ諺な
り。又可愛子には旅をさせろといふも。
足袋をはかせろと云ましがひにて。板
じめのふとんのうへも。はり／＼とい
わぬやうにといふ諺也。是はみな世
俗の心得遂にて。太平の代のけむ印に
は。傾城といふ得手ものに魂をとら
かし。父母に苦勞をかくる息子に。醫
を忝く思ふはすくなし。多くのその
中に。世上を知つたでもなく。又しら
ぬでもなく。しならぐならと。しやば
んの玉のゆうれいにひとしく。目を送
るへんてこは。いかなる者ぞと其名を

見するに。山の手の大先生。四方の赤
良。燕十。菅江。雲樂。歸橋。此愚人
男。今日はめづらしくも。富が岡八まん
宮の地内に。晴天十日の大角力有けれ
ば。札はいたみの酒きげん。是も小口
を菊の後。見物に氣は橙さじき。小角
力關脇まくの内。勝肩は墨もかわかぬ
に。賣る勝肩の番附は天にもひどく打
出しの。太鞍に木戸を出る人は。佛餉
袋の綻たるにひとしく。大入此うへ
も有るべくやと。行かふ中に五人の作
者仲間。一ツ所にこそつて。何やら相
談におよびぬ。爾角力もおもしろい
がちつと。土佐衛門が蹴合やうで。い
きな事はねへもんだ。虫齒の爲にはよ
つほとわりい。團むしば思ひ付た。
小柴が所へでもよつて。鼻の下のこん
りうと出やうじやアねへか。歸橋子。
團人の所へよつて飯をかすりのはげた
膳とも。先生をつれては出られぬへ。

なんでもかでも絹もみのふとんに。ね
やうもんと出るのさ。燕とてもいくく
らいなら。仲丁の泰江屋がい。娘はご
うぎによく出る紙よ。團此諺。妙也。
とにかの地には。歸橋子の婦人も聞
キおよひしなれば。團とんだ事をいふ。
仲丁へいくと。尾花屋から。手のねへ
はち巻をした人形も来る故。左へ土橋
を定むべし。と此相談いつけつせすし團ハ
テやばな事を歸橋子いやれ。銭がなけ
れば孔子さへ。顔濁鄒やなんをか内に。
居候にさへなられたれば。里の金とろ
くろ首が。さらずをくふときはへまる
がならい。少しもはちにあらず。赤良
がいくから氣遣ひねへはナ。團歸橋が
いやがる所なら。なを面白いが。又せ
んと竹屋の染の江がやふでは。あと
にのこりし者は。大難儀の物さしたせ。
團よし。何でもかでも。きもをなけ
出すからは氣遣ひなし。サアいかふ。

と相談きまり仲丁（の）の松江やへは入。「帰きよ」これはおめづらしこよも。三輪へ引ッこんだし。お今は、いせ市の女房になるし。どうもだれもねへす。それよ。土橋で娘をして居た。おつうと。おとへと。おやゑがよかるふ。「竹」どれもよふごせへせう。おとよ聞て來や。女立て行を。「歸橋」「歸コレ」やくしやははじめから口をかけるとがんづくから。廻しにみんな。口をさらせておゐて。かつて來さつせへ。「女はよせ」「竹」おたよさんの廻しはかわりやしたから。せんどほとじやアごせへせん。「赤」コレ歸橋子。いやだの。おっだのといひながら。此ころも來たそうで。はなしがあじだの。「燕」みんなにいつて聞かせる事が有る。今日は何でもおめへたちも。もてる

と相談きまり仲丁の松江やへは入。「帰きよ」これはおめづらしこよも。三輪へ引ッこんだし。お今は、いせ市の女房になるし。どうもだれもねへす。それよ。土橋で娘をして居た。おつうと。おとへと。おやゑがよかるふ。「竹」どれもよふごせへせう。おとよ聞て來や。女立て行を。「歸橋」「歸コレ」やくしやははじめから口をかけるとがんづくから。廻しにみんな。口をさらせておゐて。かつて來さつせへ。「女はよせ」「竹」おたよさんの廻しはかわりやしたから。せんどほとじやアごせへせん。「赤」コレ歸橋子。いやだの。おっだのといひながら。此ころも來たそうで。はなしがあじだの。「燕」みんなにいつて聞かせる事が有る。今日は何でもおめへたちも。もてる



といふかんさしはつたりをやめて。あ
くてんのヲ、あつといふ所をいひぬき
ねへ。わつちば又お琴にあつて。二は
んめをかきそくなふか一ツ。人を入
るか一ツ。わけてみるつもりさ。雲樂の色
男が心もとねへ承知かへ。雲細が
てんのねじめに。かん菊といふ所をや
めて。又此方にも仕かた有りさ。所へ
云となたもおゐでなさります。モシ
ん十さん。お琴さんはちつと。エン心
まぢでも有るか。跡でも有るか。何何
さッレ初はじめくわと何とをいひさ。エン跡はいわ
ずとよし。京都なら赤いきれでまげ結
いか。跡やばつてへしらて。下にけい
このたてもようか。みなくぬい之介と
は有がたい。此酒事し有。何コレ歸燕さん。た
れぞ賑にぎやかなたいこもちはどうだろふ。
エンまだたいこもちだけ人からだぞ。
歸橋だれがよかろう。跡たれでもい
が。コレおささん。扇あふぎ鳥も伊八と組んで

出るそうだの。居るか聞にやつてくん
ねへ。きよ角力たからどふでござへせ
うか。きよしに行所へ。女郎五人くる。おたよ。
おとはなしみゆへ。仕かけをきつに。
上田しまに黒きはんありにて。すくに火はちのそは
へすわる。跡三人はおびに煤のつくもかまわず懸
のそはへ。モシ去年の本にも出た。おた
よさんとはおめへかへ。お噂をばふだ
んいひやしたが。今日ははじめての對
面。聞及びしよりはきれぬ。時に
深川へくれば。じきにおめへのみかた。
さつそくいふ事有り。歸橋さんには。
とんだ事が出来やした。いわふかの。
と歸橋か。大大ひしやの久かたさんとや
ら。馬かたさんとやらの事かへ。よし
さ。ちつとは女郎買もさせねへければ。
歸橋さんも。いのちがつゞきやすめ
へ。ときたづらて。何そんなにおめへか高
く出ても。久かたが名を。歸橋さんが
ほつたせ。にしやくる。何それもよし
さ。久かたさんのほり物をしなさるく
らゐならば。月見の残りか。ゑびすこ

うまへの。狂言の元手でござへしやう。
そんな事はどうでもいゝが。と女郎に
とへさんも。おやゑさんも。おつうさ
んも。火はちのそばへ來ねへな。そし
て。客の良。赤良がまへへをみて。おめへ盃を。何盃を持行。どな
たへ。何どうせうの。とエン十が。何順が
い。何盃をもち行。初手かたに居るおつうに盃
をやらば。うけずにすつと立。廊下へ行。
みなくきもつぷし居る。おたよはわけぞあら
んと思ひ。廊下へかけ行。しばらさいやき來る。
何おたよさん。どういふ譯だ。何に雲樂
い。もしへ。おめへもつまりやせん。アノ
子を一度よびなさつたじやアねへか。
それならば。うらだといふなさりやア。
赤良さんも盃をさしなさりやせん。わ
つちも膽がつぶれた。何ぶし。とんだ
事をあの女郎もいふ。なんの年忌が
有つて。いつ仲町へ來るもんだな。わ
つちやア何でもしりやせん。何それで
も。おつうさんは一度出たとつて。ぬし
の盃はうけられぬといふやす。又こん
なわからねへ事もねへもんだぞ。と何か

んさして髪髪そんなら。こゝへ呼よン。
をかく。
聞てわつちが見やせう。とましめ。座一世
向わらず。赤良はさるものにてしいう。
を承知して。座敷を光くおさめんと思ひ。
いつた所が。金を出して不ふうがを尋
るやうなもんだ。そんなに頼たのへ。海姿
をみるやうな筋を出した所が。川向ひ
の立聞。やくにもたぬ事だ。おれさ
へ合点あてんすれば。へんくわ龍液りゅうえきのどく。
先のすきに何人でも。もちいられるが
世の中。ア、いゝ所へ藝者げしやが来た。伊八
来ると。むだをいふ内。赤良はおや。省江は
とへ。藝者はおつとやうきまる。
扇あふ。今日は角力かくりきのおかへりてござりま
すか。うづと谷風がせうぶは妙さ。ソレ
谷風がいつもの左をさして。土俵の際
まで。もつて来た所を一ツとつこひと。
こたへた形かたちは。釘ぬきのやうだつたが
かあいそうに。うづが形かちいさひ故。
仕まひはびちや／＼まけても。よく取
りやす。さかいの。角力などは見物事
さ。と見たやうに。何やらの思ひすがたに
うそをつく。こゝで。火ばちの炭をいぢつ

ていた。扇あふさん。おめでたふごせへす
りしが。ね。おりさんはおかれりもなしかへ。
此おりよは色で。此ころは。ば／＼アじみ
ちし女房なり。
やして。けふもけさから白髪はくはつをぬきや
した。わつちが事もやう／＼と済すて。
まづ二三日はあた／＼かき御膳ごぜん。笑ふ。
モシおたよさん。ちつと見ぬ間に。あた
まがにぎやか。そこを見込みこんで来る人
も有。伊八は三弦さんげんを出し。二ツ三ツへんく
とお定りのうた有。小冊せふにして有。伊八は赤良をみて。
は。天あまが下に知たる御方。今桶くづが
在らば。さぞはしがらんほどの。ねぼ
けな人さ。伊八は是は又かね／＼お目通
りをも。願つておりますところ。けふは
いかなる吉日ぞや。ともふ少し茶。此末と
もに。おめを下さりますやうに。ねが
ひまする。先日さきはふと藏前くらまへの御方さま
の御供で。大もんじやへさんじました
が。とり／＼の御嚙ごは。けふ思はずも御
目通りを致しますも。通の此世におふ

晦日みづひもおしつけ。さて／＼くろふがた
へません。としまは。うぬか田へ水みづを引やら。
火入ひいれな。茶をいふや。とりしまるぬ難がたばな
と。いふも古ふるひけれども。またふるきを
もつてとやらで。たばこ盆ぼんもつてさあ
／＼とみなくを引立ひだる。五人の者。生徳なまならね
坐ましきをふさげるも氣きのどくと。手て／＼に
たはこ入いれやさせるを持。床に入いれにけり。
燕十屏風えんじゅうびやうぶの中
燕十は。けふふかき狂言きやうげんのたね有つて。床へ入つ
ても。ねずに煙草たばこを吞くでかんかへいる所へ。おと
は。紙をかみながら。燕十さん。昨日
屏風びやうぶをおけてはけり。は。くわしきおぬ。とつくりと見やし
たが。なを分わりやせん。今となつて。
すむの。すまねへのと。水切れの井戸
じやア有るめへし。又わたしが。是は
どに見せる心いきが。よもや知れねへ
事も。ごせへすめへ。エ。かわつた事
をいふ。分かるの。分らねへのと。實ほん
引ひをぎみはしめへし。手めへの事をい
つ云つた。是からはそつちの氣のおち

付くやふに。昨日もいつてよこした通り。なんとなりとはろふは。[二]その様にほりたがりなせへすだけ。なをおかしと思ひやす。なせといふなせへし。おめへが内に斗居て。風呂敷の。なくなつた世話や。せうじの切はりでもするやうな人ならば。承知もしやうけれど。毎日のやふに。萬重さんの内や庄六さんの所に。ふんごんでいるものを。どんな事があつちに有るか。どふして爰までしれるもんだ。所詮。そんな事をなまなかして。どうだの。かうだのといつちやア。おめへも済まず。わたしも済まねへ。いつぞ永ひ月日の内にやア。おめへの心もしれやせう。[三]そんなおかしい革足袋の裏へ。襦をふみ付たやうな事をいつては。どうで分らねへ。なんでもかでも手めへの手で。書てはつてくれたら。心いきのしれねへ事は。有りそうもねへもんだ。[二]そ

れほどに。いゝなさる事ならば。ほつて上やせう。と硯はこと針をかりに行しあと思ひ。心よること。狂言のくだけの。末のすまでかんがへて置し所へ。おどは硯と針を持て来ん。[三]硯はこも針も。持ては来やしたが。ほんにはるつもりかへ。したた事よさあ。と手をよくつて出し。おどにかいせければ。おどは針を三本来て巻何心なくすくに置らんとせし手を。エ。是まつた。手めへ眞實はつてくれる氣か。[二]なせへ。急に嫌になんなせへしたか。[三]インニヤそうじやアねへ。むりな事だと思はふが。てめへが右の手の。鬼十と書たをけして仕まへ。そのかわりには。おれがほろう。閏四月の蜜柑をみるやうな野郎でも。そう／＼こけにやアまはされめへ。とぐつと手をしまい。三朝今市の善右衛門といふ身にて。鉄のきせるのがん首をやうじにて。高機にほちり。國分のたばこを脂さがりに吸。お琴は狂言とはしらず。たいへんたがるとのみ思ひかえりし所。鬼十がわけ合ものこらずして。かゝれし仕事なれば。此返事にこまりしが。とつくりと思案を。[三]なるほど。よくしつて居なせへす。此通りさ。とまぐつ。もし又わたし。此はり物をけす事がならぬといつ

たら。どふするつもりだへ。[二]どうするとつて。外にしやうが千も万も有ものか。いやといへば。手めへをやめて仕まふ斗りよ。[二]それではおめへの良がすみやすめへ。[三]おれが顔をつぶして。又立る法も有り。[二]どふして。[三]藝者を大勢よんで置た。其中へ廻しを呼でいわふには。お琴は右の手に。鬼十がほり物が有るから。いやだといつて。外の子供をよんだならば。手めへの良が立そふもねへもんだ。と二王立やうに。[三]は是になを。そふいふ事なら消さふから。おめへはほつてくんなせへし。[三]おきやアがれ。此はつ／＼あまめ。大門通りの長もちを見るやうに。情のねへうぬが名を。めつたに手にやア付かせねへ。せがきの札を見るやうに。やすく書のもの。事による。かたじけなくも此からだは。母の腹の三階來ひ。一ツばいのむ。

雲樂屏風の申

「^{つう}は雲樂がそとんだ寒^さひねへ。^{モシ}おつうさんとやら。さつき坐^ましきで。あじな事をいゝなせへしたね。どうもわつちがには知れやせん。おめへをいつ。呼んだ事が有るへ。^{つう}なら。どうしてもよふごせゑすはな。^{モシ}それじやアすみやせん。一ッ洗つて見せてくんねへ。」
「^{モシ}おめへも一度呼たものか。ついぞみた事もねへものか。そのくらしい事は。しれそうなもんでごせへすねへ。^{モシ}そのくらしい事はの口きこへた。わつちに上^{うへ}がむねにあり。はれたといふ貞で。おめへの方から盃をさしたのかへ。」
「^{モシ}マアそんなもんだそうさ。^{モシ}おつうさんとやら。頭つうさんとやら。ちよつと見た所はむじかつきりの。小ぬかでそだつた人じやアねへとみへるが。腰^{こし}をいごかせてみれば。おへねへさつまいもの油揚^{あぶらあげ}

だぞ。さつき向ふ四ノ二まへ五三で。ざしきへ出た所が。合点が行ねへと思^{おも}つたがきこへた。けふの内では。ともわかし。遣ひごろなひだらだと思^{おも}てした事かへ。そうもはかなく。風見のからすを見るやうにやア廻りやせん。今日の五人の一座は。南鑑^{なんかん}一片さへくふうが出来れば。此世の女郎は女房とおもつてくらし。ふられた事は雨乞^{あまがひ}の見物に出たおりと。しつぽのかるひ奴^{やつこ}肌を上た時斗。なんだめづらしそふに。ほれたつらが氣にくわねの。やき蛤^{かき}と古ひ地口を。いふじやアねへが。さばてんといふ手なしでも。春の末にやアカつほもくひ。半夏が入れば竹の子も。くわぬくらゐにうき世を渡り。東中庵のお民には。どこのうちから聲が来る。花扇が新ぞう出すに。十人客も逸^{はな}たとき。こんな事も聞て居やす。最中の月や巻せんべいは。近所^{きんじよ}の子供の

むしの種。岡場所くらゐのちよぼくれが。一ッ二ッのさやあてを。承知^{しやうち}の進ととるでもなし。錢や金のすくないは。こつちのたての借^か金組。着物も是ぎり立^たちのま。内にやアわたのは入った物は。山からもらつたこぶ巻の。ふなより外には何んでもなし。是をきいたらあきれるだらう。^{モシ}は一言の返事も出来ぬへ。たん／＼の事。一ッとして。むりじやアごせへせん。重^{おも}くあやまりやしたが。夫に付ちやア此事を。おめへのほうから洗^あはれは。わつちは此ころ來た者で。とうも外の子供衆のめへ。顔がすみやせん。まつたくおめへを。こけに廻すの。てうすのといふ譯でもねへから。一ッ料簡^{りょうかん}して。おくんせへし。^{モシ}さうおめへが。顔を立つてくれろとすなをに出れば。わつちも負づくだ。おめへのつぶれるやうにもしめへが。そのかわりに。いやらしい事だ。

おめへにたのむ事が有。どうも足をちかく來られぬ所を。ふだんくるやうに。雲樂さんがいつ日に來た。塩どめであつたの。堀井町で見かけたのと。うぬほれのやうだが。作者の名のうれやうにしてくんせへし。〔すいぶん承知さ。もふ跡はいふなさらすとよしさ。どうぞちよつ／＼と。足をちかく來てくんせへ。しかし此足のつめたさでは。合点がゆかね。〕〔雲つと引。おつとそいつはいやみぎさんだ。ねすにもいらぬ。〕と夜齋を首ヲ、寒ひ。

歸橋屏風の申

おたよは解ずに。歸橋かねているよきへよりかり。やうつつかひながら。〔歸橋さん。けふは何とおもつてへ。きさかたさんは御きげんいかへ。おやゑさんのかくしやはやみやしたかへ。〕〔今もつてかゝアは。すばといふと。大肝癪きさかたも。てめへの所へ折ふし來る

事を。太郎やなんぞかはなすから。やましくつてならね。〕〔せんとあつちに居つゝけをしなすつた時。兄さんや内のしゆびが。とんだ悪かつたそうだね。〕〔歸そんな事を。どのやろうかいつた。〕〔かめ山のわけものが。歸おもひつき所じやアねへ。おれがくるを内でもしつてゐるか。〕〔此ころじやア。おめへに出るを。知つて知らんふんよ。〕〔歸そうたろふよ。手めへが根性骨が。乞食角力の廻しのやふに。ねちれたから。かまわねへもつともさ。〕

おたよは歸橋が良をのぞきこんでよくみて。又こ手まへの胸をひろけ。のぞひて見て笑ながら。又こわひもんだね。小袖の上からも。腹の中がみへるそうさ。爰にこうして居て。どんな目にあわふもしれねへ。〔手水堀とに。效をおとし有りければ。歸橋はひらく。其效に△きのふは御架だん／＼と御申こしの段。いさゑ承知いたし。いよく／＼おしへのをりになされけや。近ふにさんじ。とつくりとこうやくの下をおため申べくとそんじ。又春のしかけの雛かた御こしうけ存け。じきに京へ遣し可申。何事も。御日にかゝり申さんとあし。とかきし奴を見て。いつものかんしやくをおこし。おたよが

來りたらは。白ひ共。黒ひとも。かたを付んと思ひしが。又心づき。此效を落せしは。たしかに狂言のすじ也。何でも狂言のうらをか。〔勝手めへのと工夫してゐる所へ。おたよ來る。〕〔歸手めへの行た跡に。ぬか有つたが。少とあけてみれば。何かこんたが有りそふだから。やめにした。よくしまつて置けばいいに。おたよは。歸橋にやかましくいれ。〔これはそさういたしました。〕〔手にとり。ひとりて。もし歸橋さん。そうはいふ。なさるが。みんなみなすつたろふの。〕

〔歸見ればどふだ。〕〔此奴に有ル事に付て。だん／＼の永ひわけさ。おめへもしつて居なさろふ。麻布の屋敷のゑんしさんが。やかましくいつて。どうもならねへ上に。正月の事も有り。何やかやで。おめへのほりものもけして此通りさ。みせる。〕〔歸どふともかつ手にしたがい。手めへ。手を用いた日して。又あつゐめをするものを。こつちのかまはぬ事さ。たよはけしたるほりものを。歸橋が目のまへにおしつけ。歸橋が良を見。〔もし。歸橋さん。どこの馬の

はねか。なしのしんか知れねへ客に。
おめへの手でありつばに歸橋と書たほり
ものを。火あぶりにあつても腹は立た
ねへかへ。もし。目ばかりはち／＼せず
と。能く見なせへし。ごうはらじやア
ねへかへ。かんしやくはおくらんかへ。
是申歸橋さん。歸橋は久しきなしなりし
が、少しのわけ合にて遠ざ
かりし故。かく有らんとは。かねて合点のうへな
れ共。是ほどにあいそつかしをいふ共。思はざ
りしが。思案歸しひとこそ思へ。何腹
がたつもんだ。其訳をいつて聞かそふ。
能くつもつても見ろ。ゑんしがそのほ
り物を消せといつた時。いやだと。手
めへがいつたなら。よもやゑんしも。
來やアしめへ。其うへで外の子供をよ
んで。正月もきれいにしまつたり。茶
屋の娘にまへだれでもして遣つて見
ろ。どのつらで。何の錢が有つて來ら
れるものだ。ゑんしがいふなりに。ほ
り物をけしたのは。やつはりおれに。
金をつかはせめへと思ふから。そいう

ふ事もしたろふ。さりともしんに頼たの
しひもんだ。といへど。心はつきがねの
くなれば。しんぼうする。おもひ付なら。おきやれ／＼と。いわ
ぬ斗のせりふだね。夫ほどに深ひ心も
なく。また金づくでもなく。慰みにけ
したのさ。歸かへした事よ。手めへたち
の。饒おほのへそほども無へたましいで。
きつとした事は。出來ねへはづよ。去
年の仲町の。月見なぞとはちがつて。
きさかたが月見なぞは。みんなちいつ
が工たく面づく。又よし原の傾け城はたのも
しいよ。深川の女郎にも。いろ／＼
は有るけれど。此ほりものをけしたの
は。金づくても。木兎うさぎでもなく。歸橋
さんといふ名にあきて。ゑんしさんと
いふ色男に。せけへをかへて見たばか
りさ。歸橋はかんしやくの
ふくろがきれて。歸コレおたよ。こ
つちを向て面つらをみせろ。人にも久しく。
だまされたが。けささんまの干ひもので。
めしをくふまでも。てめへ斗はそいう

ふ心いきたろふとは思はなんだ。ま
まに玉子の四角と。女郎のまとはな
ひといふが。近ちかころは玉子もやきなべ
にかゝつて。四角になるが。女郎の誠
はまだ出來ねへ。是で思ひあたつたは。
去年しう逃にげそくなつた時。新七も。是は子ど
もや也。へらほうだ。おれが内でもねへよふに。
何のかのとやかましく。お仲もすさき
に居たじふん。客きやくをだました事も有つ
て。がつてんづくの事なれば。二人が
せうちで手めへをにがし。あとでゆす
れば。そうおうに。金にもならふ大仕
事をかんを付て。つまめへる。やばな
仕方と思つたが。今かんがへて見る時
は。初手から出て來る心はなく。にげ
るといふつらで。おれには点をかけさ
せて。大引でどつこいと。つかまへら
れたも狂言きやうげんだ。犬めこじきめちよ
ばいちめ。けぬきとまの日和下駄。
通ひで遣ふ。此五人男の中壺人の歸橋

をば。日なたのうるしをみるやうに。今までもよくもかき廻した。けふの愚人の借金くみは。女郎を買にあるくじやねへ。此だゝひろい江戸中に。みじかい羽おりにお太刀をさし。ちろりのかげ干みるやうな。形りのおきやくは女郎のくいもの。金をしばつてとるゆへに。敵をとりて女郎をはぐのだ。から。揃ひのひやうしぎちゃん／＼で。まづ初幕からのたくり出。おきやがれ／＼と。ないて産湯のたらいへは。千川上水の源をくんで。此藏は家主。三升はおやぶんとおもつて。此世のやくしやに出たからは。うぬらが齒じやアとをるめへ。此ころ内もあままりな。ごうきにほれたの。よめるのと。印刷屋がねんきやろうでもおくやうに。人をだます程が有。きりぬいた關とりじやア有るめへし。大きなからだをひら／＼と。輕くうぬらがするからな。彫ものさは

ぎも。こつちの山。うそでもきねでもつくはどな。箔の付た此びんぼう。しめへのくだけもしりながら。ア、いま／＼しいつらのかは。おきにしろよしにしろ。すかね。氣がねへ。茶もねへから。くんでうぬが落したあのぬも。みせて小言をしつかりいわせ。夫から手段に手段をつけ。しのぎの救でもふやすのか。今じやア。そうはとらが石。矢でも。ぬでも。通らねへ。こふいふからはやぶれかぶれ。歸橋さんが。どつこひと。金のいかりをおろしてから。此仲丁のたるぬき女郎。雪かすみかのかりを切り。無ざいにするか。おりやつて。客がせうぶと手をきるまでは。しらみがくわふが。地しんかゆらふが。五分でもうごく五人でねへ。ひよつとうなぎにかたが付くと。此やかばねはけいどうのむけへ火に。みなたきしまい。女郎を置たる古跡には。へ

ん／＼艸にかやつり艸。角力とり艸。女郎花。今でもはやす法は有り。返事はとふだ。はおたよ。だれでも相手をまつる屋で。けんくわ賣ルなら買って遣ろふ。くせつが入るなら賣てやる。みんなもおきてサアごせへ。此深川のいざこさも。今年で三年ア、つがもねへ。天ひしや。きさかたざしき。歸橋はよくぬ入て居た。故。きさ方歸橋さんおきなんし。とふぞしなんしたか。たはこを存ながら。歸とんだ夢をみた。深川での。大いさこざ。いま／＼しいあまじやアねへか。きさ。おこし申たが。それはど腹がたつかへ。おめへの事じやアねへ。きさ。おたよさんの夢か。歸そんなものさ。といふ所の男迎に。長吉ハイお迎でござります。きさ。長吉とん。明々さつせへ。それからどうしたへ。歸橋さん。歸おそくなつた。こんど來てはなそう。きさ。ちつとでもはなしなんし。歸何でこんどの

事／＼。といひながら。羽おりをきて出る。きさ
上りはなに きさ おさらばよ。歸此間に來
腰をかけ。と門を出れば。からすがカア／＼。
やしやう。又内のしゆびも悪く。親るいのやか
ましきをきかん
事をあんじ。

吉原の大の鈍金無卿の御哥に

どらむすここれ の血のあまり

ゐけんで赤くなるも月／＼

後序

大門に伏勢ふせい有る時は。新造しんぞう洗面せんめんをみだるとは。鴻こうの杜撰とせんとにて。厂ちやうは嘘うそ八百。智恵ちゑの栄えいは。三味の我朋われとも歸橋ききょうなる者。一文錢いちもんぜんか生爪なまづめの智恵ちゑをふるなの辨舌べんぜつで。東深州とうしんしゅうの愚人ぐじん男の四ツの拍子しよつし木もせはしなく。歸橋ききょうにてうど大びしや。光ひかり長閑ながかんき集湯しじゆうと。出放題しゅつぱんなる戯言ぎげんも。いじやアねへじやアねへしやアねへかと。御評判ごへいはんの救きうかづさやか。利へいを満まんと儲溜もろど。蓬萊山人ほうらいさんじんと積重ねたる表題ひょうだいを。愚人ぐじん漢居かんき續借金ぞくしきんと題して。其後尻ごしに。是も他生の燕えん十が。筆ふでを染そめの井いが。閨かんに探る事さぐることしかり。

卯うそで
かためた春

志水裡町齋

序

大門だいもんの伏勢ふせい有る時は。新造しんぞう洗面せんめんをみだるとは。鴻こうの杜撰とせんとにて。厂ちやうは嘘うそ八百。智恵ちゑの栄えいは。三味の我朋われとも歸橋ききょうなる者。一文錢いちもんぜんか生爪なまづめの智恵ちゑをふるなの辨舌べんぜつで。東深州とうしんしゅうの愚人ぐじん男の四ツの拍子しよつし木もせはしなく。歸橋ききょうにてうど大びしや。光ひかり長閑ながかんき集湯しじゆうと。出放題しゅつぱんなる戯言ぎげんも。いじやアねへじやアねへしやアねへかと。御評判ごへいはんの救きうかづさやか。利へいを満まんと儲溜もろど。蓬萊山人ほうらいさんじんと積重ねたる表題ひょうだいを。愚人ぐじん漢居かんき續借金ぞくしきんと題して。其後尻ごしに。是も他生の燕えん十が。筆ふでを染そめの井いが。閨かんに探る事さぐることしかり。

大門だいもんの伏勢ふせい有る時は。新造しんぞう洗面せんめんをみだるとは。鴻こうの杜撰とせんとにて。厂ちやうは嘘うそ八百。智恵ちゑの栄えいは。三味の我朋われとも歸橋ききょうなる者。一文錢いちもんぜんか生爪なまづめの智恵ちゑをふるなの辨舌べんぜつで。東深州とうしんしゅうの愚人ぐじん男の四ツの拍子しよつし木もせはしなく。歸橋ききょうにてうど大びしや。光ひかり長閑ながかんき集湯しじゆうと。出放題しゅつぱんなる戯言ぎげんも。いじやアねへじやアねへしやアねへかと。御評判ごへいはんの救きうかづさやか。利へいを満まんと儲溜もろど。蓬萊山人ほうらいさんじんと積重ねたる表題ひょうだいを。愚人ぐじん漢居かんき續借金ぞくしきんと題して。其後尻ごしに。是も他生の燕えん十が。筆ふでを染そめの井いが。閨かんに探る事さぐることしかり。

大門だいもんの伏勢ふせい有る時は。新造しんぞう洗面せんめんをみだるとは。鴻こうの杜撰とせんとにて。厂ちやうは嘘うそ八百。智恵ちゑの栄えいは。三味の我朋われとも歸橋ききょうなる者。一文錢いちもんぜんか生爪なまづめの智恵ちゑをふるなの辨舌べんぜつで。東深州とうしんしゅうの愚人ぐじん男の四ツの拍子しよつし木もせはしなく。歸橋ききょうにてうど大びしや。光ひかり長閑ながかんき集湯しじゆうと。出放題しゅつぱんなる戯言ぎげんも。いじやアねへじやアねへしやアねへかと。御評判ごへいはんの救きうかづさやか。利へいを満まんと儲溜もろど。蓬萊山人ほうらいさんじんと積重ねたる表題ひょうだいを。愚人ぐじん漢居かんき續借金ぞくしきんと題して。其後尻ごしに。是も他生の燕えん十が。筆ふでを染そめの井いが。閨かんに探る事さぐることしかり。

大門だいもんの伏勢ふせい有る時は。新造しんぞう洗面せんめんをみだるとは。鴻こうの杜撰とせんとにて。厂ちやうは嘘うそ八百。智恵ちゑの栄えいは。三味の我朋われとも歸橋ききょうなる者。一文錢いちもんぜんか生爪なまづめの智恵ちゑをふるなの辨舌べんぜつで。東深州とうしんしゅうの愚人ぐじん男の四ツの拍子しよつし木もせはしなく。歸橋ききょうにてうど大びしや。光ひかり長閑ながかんき集湯しじゆうと。出放題しゅつぱんなる戯言ぎげんも。いじやアねへじやアねへしやアねへかと。御評判ごへいはんの救きうかづさやか。利へいを満まんと儲溜もろど。蓬萊山人ほうらいさんじんと積重ねたる表題ひょうだいを。愚人ぐじん漢居かんき續借金ぞくしきんと題して。其後尻ごしに。是も他生の燕えん十が。筆ふでを染そめの井いが。閨かんに探る事さぐることしかり。

卯うそで
かためた春

志水裡町齋

